

お互いの納得を大切に！

立川 幸治

ドクターズ・オピニオン代表・内科医

わが家には娘が3人いる。そのうち、2番目そして末の子の出産に私は立ち会った。

何でも自分で関わらなければすまない性格から、私はどうしても赤ん坊がでてくるその瞬間にいたいと常々考えていた。しかし、3人のうちまさしくそのときにい合わせることができたのは真ん中の娘だけだった。

私が立ち会いにこだわったのは、実はただい合わせたいという思いからだけではない。私の妻は第1子出産後、血小板減少性紫斑病という厄介ものを抱え込んでしまったため、分娩時に何らかの決断を下す必要があったからである。私はそれにコミットしたかったのだ。

幸い、次女の場合、理想的とまではいかなかったが、私たちはその思いを遂げることができた。緊急検査の結果を得て、経膣で行くかの最終決断は私たちに委ねられた。そのとき助産婦や産科医師がどうサポートしてくれたのか、よく覚えていないが、私は緊張と興奮のなかで満足が得られたような気がする。

それに反して、3人目のとき事態は私たちを素通りしてしまった。

三女は緊急帝王切開で生まれている。私が駆けつけたのは赤ん坊が子宮から取り出され吸引を受けながら、しかめ面をし、母親も“こんなはずでなかったのに”という落胆の表情で横たわ中であった。もちろん帝切に至った経過には多くの医療スタッフの善意があったようだが、残念ながらその決定は緊急といった名のもとにワンサイドで行なわれてしまった。正直言

って私は不満足な思いで一杯であった。

エゴイスティックな主張ではあるが、連絡を受けた段階で、私は自分の決断を用意していたし、その結果生じたことはすべて甘受する覚悟もあった。納得しながら物事を進めたい、その思いは十分に伝わっていたはずだと信じていただけに、裏切られた、そんな感情は否めなかった。

医療者には万が一を避けたいという本能がある。また、すべて良かれと考え計らってくれる。しかし、患者の側でも同じように考えている訳ではない。おこがましいかも知れないが、“いらぬお節介”ということもあるのだ。

“患者の満足を最大に”というせりふが最近よく聞かれるが、この満足とはいったい何から得られるのか。納得できるか否かがその分かれ目。私はそう思っている。残念ながら第3子のケースはいまもって私は納得がいかない。強い不満の思いが残っている。

わが家の場合結局結果オーライであった。こんな口をたたくべきではないのかもしれない。しかし、私はそれでも自分の納得を大事にしたい。医療者は大切な演者ではあるが、所詮は舞台を固める脇役であることをしっかり、自覚してほしい。

かつて輸血を拒否する人々を非常識と決めつけた私であったが、今思うになんと傲慢であったことだろう。常識は人によって違う。お互いの納得を探りながら、悔いを最小にする努力こそが一番大事なのではないだろうか。